

越佐 歴史漫筆 ～ 往ったり来たり ～

7

糸を績む、布を織る

新潟市歴史博物館(みなとぴあ) 館長 伊東 祐之



PROFILE

伊東 祐之 (いとう すけゆき)

1952年長野県の生まれ。新潟市で育ち、新潟大学人文学部・東北大学大学院で日本史を学び、『新潟県史』『山古志村史』など自治体史の編さんに参加する。江戸時代から近代の新潟地域の民衆社会を主に研究する。1987年から新潟市に勤務し、新潟市史の編集にたずさわる。2001年から新潟市歴史博物館みなとぴあの開設準備に加わり、2004年3月の開館後も新潟市歴史博物館に勤務する。2018年から館長を務める。

■ 糸と布

寒くなると無地の黒っぽい^{えんじ}臙脂の薄手のセーターを思い出す。1960年代、私の母は家で内職をしていた。家庭用の毛糸編み機で、業者の持ってきた毛糸を指定されたサイズ、デザインの身ごろに編んで納める内職であった。定期的に業者が製品を集めに来て、かわりに労賃と毛糸を置いていった。私も両手を体の前に立て、長巻の糸を糸玉にするのを手伝った。母は内職の合間に家族のセーターも編んでくれた。私は、母が縄目模様や込み入った色模様を編むのに苦労するのを見ていて、自分のセーターは無地がいいと言った。それが臙脂のお気に入りのセーターである。ほつれたセーターは解かれて弟のセーターに編み直されたが、今はコタツがけの^{ぬきいと}緯糸

になっている。

新潟市歴史博物館では開館以来、糸よりや機織りを度々題材にしてきた。今、服は店で購入する物である。古くなったり、汚れたりした服は、燃えるゴミに出される。子供たちは、自分の着ている服が布を縫ってできていること、布が糸を織ってできていることを知らない。恰好をつけたり、暖を取ったりするために着る衣服に、長年にわたる人々の技や工夫、努力が詰まっていることを知ってほしい。実は現在もあなたの見えないところで多くの人が、あなたが着ている服のために、綿摘みをしたり、服を縫ったりして働いていることを知ってほしい。そう思って、博物館で取り上げている。

■ 「女工」

遅れて資本主義化した日本経済をまず押し上げたのは、繊維産業だった。海外からの需要の多かった生糸を生産する製糸業と、大規模な機械制工場生産



図1 みなとぴあボランティアが組み上げた高機でコースターを織る

を取り入れた紡績業である。この産業を支えていたのが「女工」とよばれた低賃金の若年女子労働であった。新潟県、特に魚沼・頸城・古志の各郡はその女工の供給地であった。大正14(1925)年の調査では、新潟県から県外へ行っている女工は7万1,542人にのぼり、全国合計の21パーセント余、全国第1位であった。ちなみに第2位の島根県は1万8,000人余である。農家の苦しい経営も低賃金若年女子労働が支えていた。

製糸業の中心は長野県で、女工は熱湯の注がれた釜の中の繭から糸を引き出して、機械が繰り上げている糸に繋ぐのが仕事だった。繋ぎ方が悪いと糸の太さにムラが出る。出ると罰金が課せられ賃金が減らされた。その労働や生活の厳しさは『ああ野麦峠』に描かれている。製糸の雇用は1年契約で、暮れに1年の給金を持って家に帰り、正月明けに信越線でそれぞれの工場へ向かった。

紡績業は東海や近畿の大工場であった。大正5(1916)年に「工場法」が施行されたこともあって、大正・昭和期には労働条件は良くなっていた。私は大学生のときに、大正から昭和にかけて紡績工場の女工さんだった人たちから聞き取りをしたことがある。町や村には「募集人」と呼ばれる人がいて、小学校を卒業する女子を集めて大阪・三重・愛知などの工場へ連れていった。遠いこともあって1年ごとに帰ることはなく、親元を離れて思春期を工場で働き続けた。「寄宿舎では、食事は白米で、家で食べることのなかった魚が付いた。縫物や生け花、習字を学ぶことができた。休みの日には街へ映画を見にでかけることもあった。工場で辛いことも多々あったが、家では経験できないことができた」と話してくれた。賃金は工場が管理し、親から送金の依頼があると会社が家へ送金した。女工をやめるのは、多くは親の決めた結婚をする時だった。貯めた賃金を持って、故郷に錦を飾った。しかし、お金は家の売った土地

■ 表1 大正末女工の1日

製糸工場		紡績工場早番
	4:30	起床
	5:00	
起床・ラジオ体操 仕事	6:00	勤務
朝食 仕事	7:30	朝食
	8:00	
	9:00	
10分休 仕事	10:00	勤務
	11:00	
	12:00	
昼食・40分休 仕事	13:00	
	14:00	昼食
	15:00	青年学校
中休(おにぎり) 仕事	16:00	
	17:00	自由時間
	18:00	夕食
夕食 自由時間	19:00	自由時間
	20:00	
	21:00	消灯

『栃尾市史』中巻 から作成

を買い戻すために使われたり、親が新しい事業を始める資金になったりした。「嫁に行ってからが辛かった。農作業のやり方も知らず、そんなこともできないのかと姑に叱られた。それが辛かった」と聞いた。

■ 「織婦 (はたおりおんな)」

江戸時代、製糸業や紡績業がなかった時代、越後魚沼の農家経営を助けていたのは織物であった。主



図2 「北越雪譜」掲載「雪中晒縮晒図」(部分・加工)

に雪に降りこめられた時期に女の人が家で織っていた。織っていたのは、苧麻ちよまを原料とする縮や、生糸や繭を原料とする絹や紬であった。

縮は魚沼の伝統的な産業であった。今、その技術は小千谷縮として受け継がれ、重要無形文化財に指定されている。縮は江戸時代前期には魚沼で織られていたらしいが、17世紀後期に播磨国明石から人が来て始めたという伝説があり、このころ技術的に確立し、盛んになったらしい。原料の苧麻からはいだ皮を精製して取り出した繊維が青苧あおぞである。江戸時代中期以降は米沢・会津地方から購入した上等な青苧を用いていた。縮織りは、この青苧を績み、糸をよることから始まる。塩沢の縮商人でもあった鈴木牧之は『北越雪譜』で「機婦」の縮生産について書いている。まず糸を「績むには績む場所を定め、体を正しくして呼吸に合わせて手を働かせる。きちんと定まった場所で績まないと糸に太い細いがある、使うことができない。糸をよるときも同様である」と述べる。

織婦が強くよりのかかった糸を織機にかけて家で織る。湿気がないと糸が折れてしまうという。牧之は、「上等な縮を織ろうとする織婦は、家の中でも

煙が入らず、明るい部屋をよく清めて、新しい蕙を敷いて、四方に注連縄しめなわを回した中央に機を建て、他人は入れず、毎日体を清めて機に向かう」と述べている。織り上がった縮は、正月、2月に晒屋さらしやに渡される。晒屋は、雪の上に平らで汚れの無いさらし場を設け、「一夜灰汁に浸してよくよく水洗いして、雪上で晒す。これを幾日も繰り返して晒し終える」と言う。

牧之は「績み始めから織り終えるまで、すべては雪の中で行われ、雪の中の天然の湿気がなければ縮はできないのだ」と言う。「織物業は業者が織子を抱えて専業で織る方が効率的だが、縮は人の手を労する事が膨大にあり、手間賃で計算できるものではない。績み始めてから反物になるまでの苦心労繁は大変なもので、雪の中で籠っている女性の労働だからできることなのだ」といっている。

■ 縮の行く先

表2は『十日町市史』掲載の中条村枝村の村々から弘化2(1845)年に商人に売り渡された縮の数量と村の軒数・成人女性数を比べた表を改変したも

■ 表2 弘化2年 中条村枝村15か村の縮生産

	反数	織出軒数	宗門帳記載	
7月改め	653	294	戸数	成年女子 人数
10月改め	630	267		
合計	1,284	561	251	608

『十日町市史』通史編2掲載表を改変

※「織出軒数」の合計は延べ数、「成年女子」は15～60才の女性

のである。年度が異なるのか、軒数の定義が異なるのか、合計では宗門帳の軒数を超える織り出し軒数となっているが、ほぼすべての家で縮を織っていることは確かだろう。15才から60才の成人女性の数と縮の反数を比較すると、合計で1人あたり1年間2.11反となる。このころには1年中織るようになっていたのであろう、冬季間の織り数を示す「7月改め」も、その後の織り数を示す「10月改め」もほぼ同じで、冬季間だけでは1人あたり1反強、1軒あたり2.22反である。縮織りがいかに手間のかかるものかが知れる。

長期間かけて丹精込めてようやく織り上げた反物はいくらで売れるのか。明治36（1903）年に発行された『北越機業史』によれば、明治元（1868）年に魚沼地方で織り出された各種縮は13万5,000反で、その価格は30万3,750円になるという。平均すれば1反2.25円つまり、当時の表記なら金2両1分になる。米価が高騰している年だが、2両1分あれば米1石（約150kg）以上買えるだろう。

魚沼で織られた縮は、仲買商人が買い集め、縮問屋が小千谷・十日町・堀之内の縮市で販売された。この3市場で開催日を決め、3日間の間隔を空けて堀之内、小千谷、十日町の順に市が開かれた。市の日取りが決まると問屋は、三都、つまり江戸・大坂・京都などの得意先へ飛脚を立てた。市にはこれらの都市を始め全国の呉服商の買役や、仲買人などが集まり、問屋の店先で品定めをして取引が行われた。

買い取られた縮は、三都の呉服商によって販売された。また、縮の行商人もいた。十日町や柏崎の商人が縮を仕入れ、江戸へ担いでいき、得意先へ売り歩いた。問屋の中にはみずから江戸に出店を開き、縮を販売している者もいた。「越後縮」のブランドで売り出された魚沼の縮を仕立てて着る事ができたのは、大名・旗本などの有力な武士の家の者や大店の商人などだけであった。縮は、織り出した女性たちは勿論、越後の庶民が着る事のできる織物ではなかったのである。

■ 「女仕事」

越後では、こうした縮や絹といった高級織物だけでなく、庶民が日常着る織物も織られていた。『北越機業史』には、江戸時代から木綿織が行われていた産地として、見附・亀田・吉田・小須戸・葛塚・村松・長岡・今町が挙げられている。明治に入るとさらに産地は増える。これらの町では木綿の布が縮とか結城とか呼ばれて販売されていたが、その織り手もまた町やその周辺の農村の女性たちであった。

衣服生産に関わる歴史を垣間見た。糸を績む、布を織る、服を縫うといった仕事は、長く社会的に女性の仕事とされ、家の経営を補助する「女仕事」とされてきたが、これは社会的にも家にも不可欠な労働であった。

（参考：『北越機業史』『十日町市史』『堀之内町史』『栃尾市史』『新潟県史』）